

交通外傷による肝損傷を保存的に治療した1例

東京西／徳之島徳洲会病院 初期研修医 平畑昌宏

特に既往のない36歳女性。交通事故のハンドル外傷による右季肋部痛にて当院に救急搬送された。FAST陽性にて胸腹部造影CTが施行され、肝周囲およびダグラス窩に血液と思われる液貯留があり、肝左葉内側区域S4を中心に外側区域S3の一部を含む日本外傷学会臓器損傷分類Ⅲa型の肝損傷を認めた。vital signが安定している事から緊急開腹術やTAEなどは行わずに保存的加療を選択した。来院2時間後にHbが5.4g/dLまで低下し、ショック状態となったが、輸液および輸血にて改善した。入院後も腹腔内出血の増加や腹膜炎などの合併症を起さずに経過し、12日間の入院加療にて退院となった。

以上の症例に関して、臓器損傷を伴う腹部外傷の輸液療法や治療法を選択について考察する。